

第2回造形表現に関するアンケート調査実施 についての設定・内容の考察

加藤 怜子・日名子 孝三*

Abstract

This monograph aims at analysing the various problems concerning “the education of expression” in lectures and teaching in future.

The title is “The Consideration on the Questionnaire Items concerning the Education of Expression-No.2”.

Kozo Hinago (Full-time Lecturer on the Educational Psychology for Early Childhood) takes on Contents ①-the Questionnaire Items to the university students.

Reiko Kato (Professor on the Educational Psychology for Early Childhood) takes on Contents ②-the Questionnaire Items for Kindergarten Teachers.

Items concerned here are :

- ① The students, thought in their daily-lives on general art and art expression and the infants' artificial expression through early childhood
- ② In what ways, the kindergarten teachers resolve the environment, various materials, and supports to the infants

Key Words : Education of Expression

The Consideration on the Questionnaire Items Concerning about the Education
of Expression-No.2

* Reiko Kato • Kozo Hinago

Correspondence Address : Department of Human Studies, Bunkyo Women's University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 13, 1999.

Published December 20, 1999.

はじめに

本論文は、「造形表現」に関する保育をめぐる諸問題について、今後における講義・指導の参考にすることを目的として、第1回『造形表現に関する幼稚園教諭と学生の意識調査』（本学人間学部紀要第2号）で報告した結果に基づき、前回に引き続いてさらに新たな点について事項を設定し、第2回アンケート調査実施に向け考察したものである。因みに、表題は『第2回造形表現に関するアンケート調査実施についての設定・内容の考察』とする。調査対象別に、

①学生に対する質問の部分……………専任講師 日名子孝三

②幼稚園教諭に対する質問の部分……教授 加藤 怜子

が担当し、

①については、将来保育を目指す者として幼児の生活における造形表現全般にわたる指導援助の内容を、学生が日常生活の中で考える一般美術と幼児の造形表現に関わるもの。

②については、現代の幼児の生活環境および造形表現を行うに際しての環境設定・材料・幼児に対する援助のあり方。

における質問内容を設定・考察したものである。なお、

「本学人間学部紀要第2号」で報告した第1回『造形表現に関する幼稚園教諭と学生の意識調査』は、以下の設定の下に行った。

A. 文京女子短期大学保育科2年一学生数137 (アンケート回収率100%)

B. 文京女子大学人間学部保育心理専攻1年一学生数156 (アンケート回収率100%)

C. 保育現場—私立幼稚園 (アンケート依頼園数20)

回答園数—14 保育者数124 (アンケート回収率 70%)

・学生に対しては、美術の初歩的な知識 (日名子担当)。

・幼稚園教諭に対しては、現場における幼児の造形表現に関する対応 (加藤担当)。

1—(1) 学生に対する質問内容について

①では、前回保育を目指す者としての美術に対する一般的知識についての調査を目的としたが、第2回のアンケートでは、将来幼児の生活の中における造形表現の援助を考え、日常生活に即した次のような質問内容の設定が考えられる。

1. あなたは、車内広告や映画・演劇などの案内広告、ショーウィンドウのディスプレイ等を宣伝媒体としてではなく、一つの表現として見るがありますか。

ることによって子どもの造形に関わる材料の在り方、保育室の環境設定の在り方などが、見直される、と考えられる。保育現場という一つの枠の中の造形と考えるよりも、日常生活全体の一部としての造形表現と考えたほうが、より自然な援助が出来るのではないか。学生や現場の援助者が日常生活の風景をどのような角度と視点を持って接するかによって学生・援助者が個性を覚え、子どもも含む他者の造形表現に対して、受け入れやすい状態が生まれるのではないかと考える。

《2.について》

前回アンケート調査における設問1.「あなたは美術館に行ったことがありますか」による結果では、80%以上の学生が美術館に行った事が「ある」と回答している。

- A. ・行ったことが「ある」と回答—128名(93%)
 - ・「いいえ」と回答— 8名(6%)
 - ・無記入— 1名(1%)

- B. ・行ったことが「ある」と回答—127名(81%)
 - ・「いいえ」と回答— 29名(19%)

80%以上の学生が、関東一円の美術館に行っているが、中でもアンケートの項目2に「あなたの知っている画家・彫刻家ないし造形作家の名前をあげて下さい。(複数回答)」には、美術史に残る作家に混じって〈ヒロ・ヤマガタ〉に代表されるイラスト系作家の名前が、上がっていることが目を引く。

ここに見える一つの特徴は、〈ヒロ・ヤマガタ〉、〈ラッセン〉に見られる、破綻がなく綺麗で結果的な画面を制作する作家名が、ピカソ、ルノアール、レオナルド・ダ・ヴィンチ、モネ、に続いて保育科・保育心理学科ともに集計上位に入っていることである。イラストにも色や形が、絡み合った、抽象性を持った作品と、上記作家に見る絡みのない平坦な作品とに分けられるが、時代、表現スタイルが変化しても受け入れられやすい、と言う意味において、印象派と平行位置にあると思われる。

また、造形表現は目に見えたり知っているものを描いたり作ったりすることだけが造形表現(美術)ではないが一般的に受け入れられやすいのは見る人間の認識範囲内の表現に安心感を見いだすようである。このことは、全国各地の美術館で行われる印象派をテーマとした、展覧会と現代美術と言われている作品の展覧会入場者数状況の差を見れば明らかであろう。目に見える具体的な物や事柄ばかりでなく、感情や夢と言った無形のものも、造形表現の中に入ってくると思われる。また、言語では、表現しきれない何かを表現する大切な手段でもある。

具体的な物や事柄、が表現されているからといって言葉や思考の上で見たと(理解した)思い込んではいまいか。余計な思考を捨て去り、見たり、触れるという行為で表現作品に接した時初めて具象・抽象の境がとれ区別なく表現の自由さを認識できる。

子どもの表現が、その年齢・感情・経験・体動などと絡み合っただけで大人にとっては、認識外(無

形な、もしくは難解な要素を持った)の造形となって表出・表現され、それが子どもの造形の魅力となっている事に気づき、造形が、表現の一つであると認識しやすいのではないか。「抽象的な造形」に回答率が高くなることは、造形表現に対する認識の変化を学生の中に期待出来る。と、同時に子どもの造形表現も保育現場の中だけのものではなく、大きな意味では、美術全体の中における一つの流れとして認識される事を期待したい。

《3.について》

公共施設に絵を描いたり、文字を書いたりする行為は、一般常識から考えた場合許される行為ではないだろう。ここで考える問題は、行為の、良し・悪し、ではなく、描かれたものをどのように受け取るかの問題であり、極端に言えば「いたずら描き」と、とるか「一つの表現」と、とるかの問題である。私達の生活環境を考えた時、誰もが物質的にも時間的にも空間の狭さを感じて生活をおくっているのではないだろうか。公共スペースを私物化することによって、ある自由さを得た感覚になり、ある種の欲求が描くという形をとる。人間には、ある枠から出て行きたいという願望がある。日常生活においても旅行に出かけたりするのは、それを求めているからだろう。これは「いたずら描き」と決めつけず見ることが出来るならば、大人が、公共施設に描く行為も、子どもが壁や地面に描くという行為も描く(書く)という意味においては何ら差はない。

両者とも、他からの拘束から逃れた、自由な場であるからこそ、のびのびと行動し、発見の喜び、そこに完成した満足感も味わえるのである。さらに失敗しても気にすることもなく、新たな目的へと考えをめぐらすこともできる。また、自分の生活経験から生まれたイメージが表現できる場でもある⁽¹⁾。

何かを創造することは、一般常識から離れた視点が少なからず必要とされるが、離れた視点から日常を見ることによって描く・作るという行為が新しい展開を見せるのではないか。

今、パフォーマンス(Performance)という言葉が盛んに使われ、実演されている。パフォーマンスとは何か、なぜ従来の演劇の公演、音楽会、舞踊公演、展覧会ではいけないのかというところに現代の人の表現を考える一つのカギがあるように思う。

本来パフォーマンスの意味は、公演、興行である。劇や音楽会やバレエなどは公演、歌舞伎や大衆演劇などは興行というのが一般的だが、今パフォーマンスというときには、異なるニュアンスが感じられる。芸術という、人が長い間美なるものを追求した結果つくり出し得たすばらしい作品や活動は、公演、興行、展覧会などの名称で公開されるが、それらには決まった約束ごとや形式などがある。音楽でいえば、オーケストラは楽器の種類、舞台上の位置、指揮者が中央に立つなど、誰も疑うことなく当然のこととと思っている。こうした一つの形は、長い歴史の中でつくられてきたもので、一つの形式美でもあり、価値あるものであることは誰もが認めるところである。

それに対してパフォーマンスという名称で行われるものも含め、現代の公演、興行には新し

い動きがたくさん感じられる。一つは、すでにでき上がったもの、完成の域に達したと思われるものの枠の中で創造的活動を行っている限り、限界がある。その枠をはずす、あるいは破ることで、新しい創造を生むことができる。それは人の生き方でもあり、現代社会の限界を破ることで、人間的な限界がなくなり、人間の根源的な力が復活して、新しい創造が可能になるという考えである⁽²⁾。

《4.について》

人は日常の中において「何を・何処を」見ているのか。また、日常をイメージ（形・色・音等）として、どのように表現するか。造形表現に限って言えば、形・色のどちらでとらえているのか。一般的には、実対象を重視するタイプは「形」、印象を重視するタイプは「色」にこだわる、と言えるかもしれない。私たちは日常さまざまな事物を視覚にたよりながら描写するが、意外に不確かなものである。対象をどのようにとらえるかは、一般的にはその対象に対する本人の考え方、視覚など総合的な感覚によってとらえられる。イメージとして「形」と答えた場合、形に束縛される傾向が強く、動きがとり難くなり「色」が二次的になりやすくなることが考えられる。「色」と答えた場合、形の束縛がないため対象を全体的に大きくとらえることが可能である。形のとらえ方も緩やかで細部へのこだわりが少なく、次への展開が容易になると考えられる。

《5.について》

造形における色彩・形態の考え方として、色彩と形態は合わせて一つであると考えられる。1860年代以前の写実主義において色彩は、形に付随するものと考えられていたが、モネに代表される印象派、特に後期印象派の出現によって光から色彩へと画面の変化が表れる。形によって表されていた観念・感情が色彩によって表されるようになる。1900年代に入りフォーヴィスム、キュビスムなどの造形運動を繰り返しながら色彩と形態は融合し現在の表現形態が確立される。

一般的な造形表現から言えば形をしっかりと表せる人は色に弱く、色で表せる人は形が弱いという一面があると言える。違う言い方をすれば形がしっかりしている人は実質的であり、色で表せる人は感覚的と思われる。しかし、学生が造形表現を試みる場合、大多数は形にこだわり、描画においても立体においても色と形は離されて考えられることが多いようだ。形から入った場合の問題点として以下のことが考えられ、動きのある表現がとり難いと思われる。

1. 形に対する勘違い
2. 形にこだわるため、動きのある形態は苦手
3. 認識する色の幅が狭い
4. 感情を対象に入れられない

色彩と形態の結びつきが、もっともよく理解できる例としては、アンリ・マチスの切り紙で

作った作品群 Jazz (1943-1947) が上げられるだろう。マチス自身が、紙に自分で調合して作った色を塗り、それを形に切り取り、貼る、という作業からこの作品群は成り立っているが、これらは形に色を塗るといった概念とは反対に、色が形を作るという最も具体的な例であろう。

日常の中で形より、色に強く反応する人は、まず色があり、次に形がくるために、枠を作って自ら形に縛られることが少なく、色としての形を考えやすい。また、中から外へと形を広げられるため自由な形態を作りやすいと言える。このことは学生が将来現場で子どもの流動的な造形制作の援助にあたる時、重要なポイントになると考えられ美術とのつながりもありうる。

《6.について》

触感によって対象の質感を確かめることは成長期の子どもが、その経験によって社会や環境を知ることでもわかる。人間の五感の中でも「実」に最も近い感覚のように思われる。触ることによって質感・量感を覚え、安心感も得られる。子どもは何にでも触って対象を確かめようとするが、大人になっても本質的には同じことが言えるのではないか。子どもの頃には、砂場や泥遊びによって質感や形、量、などを確かめる。また、大人になれば何か物を購入する場合には触れて確かめようとするのが普通であり、見た目よりは実感を欲しがるのは共通と言える。

『たとえば、ぬいぐるみのような仔犬がいれば、たしかに目は仔犬を外側に視ます。でも、同時に、そこにはふわふわした毛の触覚や抱いた時のぬくもりも含まれています。コロコロ動きまわる運動さへ視ているのです。食物や植物に注ぐ視線とて同様です。それらは、味や香りや歯ざわりも伝えてくるのです。』⁽³⁾

粘土を使用して行う「泥遊び」的な設定による授業を行って言えることは、土に積極的な学生は身体をよく使い、行動的である。これらの学生は、他の課題においてもより積極的にとり組む姿勢を見せ、特徴として次のことがあげられる。また、これらは保育現場で活動するための条件の中に入ると考える。

1. 汚れを気にしない
2. 身体を使うことに苦痛を感じない
3. ねばり強い

生活環境の変化とともに、子どもたちも自然になじむことが、少なくなり、特に都市部に住む子どもたちは、土に接する機会が年々減りつつある。子どもは、触感的な意味からも泥遊びが好きなのは当然であるが現在の生活環境を考えた時、まったく土の感触を知らないまま成長した子どもや大人がいても不思議ではない。子どもたちは、遊びによって人とのつながり、道具の使い方などを学習しながら成長してきたのではないか。

しかし、近年、子どもたちの口から「疲れた」と言う言葉を聞くことが多い。子どもの頃日暮れまで外で遊んでいて親に叱られていた筆者からすると首を傾けたいような言葉である。遊び→楽しい→疲れを知らない、という方程式は無くなりつつあるのか。

また、手が汚れることを必要以上に気にする子どもも見うけられる。これは、近年の住宅事

情（マンション等つまり、きれいで汚してはいけない空間）を考えた場合、多少とも影響があるのではないか。「疲れた」「手が汚れる」の二つは上記した1. 2. と重なるが1. 2. の要素を持った学生が、子どもの頃よく遊んだ経験を持っているのかどうかは、これから何度かのアンケート調査を重ねた上での結果を見なければ何とも言えない。子どもの身体に内在する野生をのびし、健康に成長させるのが、援助者の仕事だとすれば、日常から身体を使って知識の習得を試みる学生は貴重な存在と言える。

《7.について》

上手・下手の問題については、繰り返し述べるようだが造形表現に上手・下手の問題は存在しない。大きな問題は、表現を試みる以前に、上手・下手を考えてしまうことである。対象を再現したり自分のイメージを具体化するには、ある程度の技術力は確かに必要である、と言えるが、それは、上手・下手のことではない。対象をそっくりそのまま再現したければ写真でとらえれば良いわけである。が、写真も表現の一つであるから、ただ対象に向かってむやみにシャッターを切っているわけではなく、さまざまな技術を駆使し、自分なりの表現方法を用いた写真を制作する。報道写真に見られる戦闘場面なども、単にエキセントリックな場面を撮ったのではなく、アングルやトリミングなどの技術を使って造形的な表現を試みるわけである。技術とは、表現を試みるための方法であり、風景や花をそっくり綺麗に仕上げるためのものではない。

この勘違いが、長い間多くの人達に「私は絵が下手だから」という言葉を言わせる原因になってきたのである。抽象という問題を考えた時、上記したことが解決することによって、造形表現が一般的にも再検討されることを期待したい。

《8.について》

子どもの表現する造形は、大人から見ると抽象的に見えたり、感じたりするものだが子どもは、抽象的な絵や立体作品を描いたり作ったりしている訳ではない。子どもが、表現を試みたら、そのような表現になったということであるが、分からないという意味合いにおいて、子どもの表現と大人の抽象作品に対する感覚は似たところがあるように思える。つまり「何を表現しているのか」。大人にとって日常生活の中での「何」は重要な言葉である。私たちは普段「何がほしい」「何が言いたい」「何がしたい」「これは何だ」など、対象から具体的な答えを期待するものである。そのことが、自ら答えの出にくい抽象的作品などに対する時、「分からない」と言う言葉で解決してしまうと考えられる。答えが出ない、出にくい、という表現や作品が存在しても良い筈である。言葉に頼らない好奇心を持ち「感じる」ということに慣れ、「何が」が観念的な主体になっている現在の考え方を改めた時に、初めて造形表現に対する接し方も違ってくるのではないか。普段から、抽象、具象、を考えず造形表現に接することは、子どもの造形表現に接する時、意外と先入観なく素直に援助を行うことが可能になるのではないか。子ども

の造形とは、遊び、生活などが入り混じった流動的なところがあり「何が」の観念では、とらえ難いものである。

前回アンケートにおいて《8.について》の回答では

1. 感情を表現するもの
2. 自己（自分）を表現するもの
3. 想像力を養う
4. 自分の思ったことやイメージを形にして表す

などが、最も多い回答であったが、ではなぜ学生は、自分自身が造形表現を行うにあたって表現ではなく上手・下手にこだわるのかが問題であろう。

(日名子孝三)

2—(1) 幼稚園教諭に対する質問について

A. 子どもの表現は、生活や遊びの中で表れ、状況に大きく依存していることを考えると、その子どもと同じ立場で認識しない限り、その表現の心は、理解し難い。同じような表現構図をとっていてもその背後にある個人の意図によって表現される意味も異なってくる。したがって、幼児の表現の発達を考察するにあたって、できるだけこのような広場を大切に⁽⁴⁾する必要がある。幼児の表現はあくまで、主観的なのである。

- ① 子どもの描いてきた絵（自由画）を受け取るとき、描いた本人に内容をたずねますか。
 - a. 聞かない
 - b. 聞く
- ② そのときの子どもの様子について。
 - a. すぐに答える（その場合年齢は）
 - b. 答えない
 - c. 描いてないことまで話す
 - d. 描いてない別のことを話す
 - e. 一つ一つ丁寧に説明をしてくれる
 - f. 教師の顔のみを見て、何か言ってくれることを待つ

B.

幼児の思考は一般に論理的思考に対立するという意味で「直感的思考」とよばれている。かれらの思考は要素や関係を区別したり、くみ合わせたりする能力に乏しい。つまり分析や総合のはたらきを欠いている。フランスの哲学者、ルナンは、この性格を原始人の思考の中にみた。かれによれば、「原始人は、ものを分別したりせずに自然の状態の中でみる」。この思考様式を、ルナンは「混同心性」とよんでいる。つまり人間の認識が、ある対象に向かうときには、全体

を混同的にみる見方と部分を区別してみる見方と全体を総体的に再構成する見方があるように、人間の思考のすすめ方も混同・分析・綜合の三状態をとる。第一の混同心性は、第三の綜合思考と異なり、その思考の対象は分析されてもいないし、くみ合わされてもいない。つまり体系をなしていない。それがいちばんはっきりと示されているのが、子どもの絵である。絵は表現機能と同時に表象機能も表しているからである。この二つの機能は子どもの思考の中ではまったく分化されていない。幼児がよくかく図式画は、おとなの描くマンガとは異なり線の意味についての分析も綜合も行われていない、子どもがみるがままを表している。全体の構造が散漫で、部分と部分との関係が不明確である。子どもの混同心性の表現である、子どもの構図に出てくる個の関係が多面的であり、原因が結果であったり、結果が原因になったりするのである。

- ① 行事の絵を子どもに描かせていますか（遠足、運動会等）。
 - a. ある
 - b. ない
- ② その時の子どもの様子について
 - a. イメージが出なくて困っている
 - b. 楽しそうに喋りながら描く
 - c. 教師にたびたび自分の内容について質問をする
 - d. 描いている途中でやめ、別の紙を要求したり、裏に描いたりする
 - e. 何も描けないと言って投げ出す
 - f. 関係のない別のことを描く

C.

大人はテレビを見るとき「ワクの中」でみている。現実と違うということを十分知っている。したがって、それからの影響も希薄になる。それに反して、子どもは、テレビの中の現象を一種の現実と見なしている。現実的迫力がたいへんつよいのである。未分化の子ども達は登場人物と自分を一体化させ易いのである。

- ① 担当されている組の子ども達の自由画帳に、どのくらいのページにテレビの内容、及び登場人物が描かれていますか。
 - a. 全くない
 - b. 全ページ
 - c. 2～3枚
 - d. 1／3ページ
 - e. 1／2ページ
- ② 子どもの描いている様子について
 - a. 描けるとすぐに見せにくる
 - b. 教師に見せず、友達のみに見せる

おわりに

造形表現を考える時、常に問題になるのは、大人（見る）側の認識の在り方だろう。表現に対する思い違いは、一般社会の中にも根強く残っているのが現実であり、そのことは、上手・下手、分かる・分からない、と言った言葉に集約されているようだ。学生や現場の援助者が日常生活の中で出会う造形表現について、どのように感じ、認識しているかを探りだすことは、これからの子どもたちにとって重要なことと考える。

『たとえば、何人かの人たちが、林がある同じ風景の写生をしたとする、ある人はふつうに見えたまま描きますが、人によっては木と木の間の形が面白い、と言って木と木の間の空間を描きます。つまり、ものの見方（視点）が違うのです。たぶん、その場に居合わせた人たちでなければ、何を描いたのか分からないでしょう。しかし、木と木の間に描いた人にとっては、そこに興味があったのです。つまり同じ風景を見ていても人それぞれの感覚によって、まったく違う、ものの見方があるということです。』

「そこに」という感覚を学生や現場の援助者が、外側からの意見ではなく、自分の認識として持ち得ていければ、造形表現に関しての誤った考え方を踏襲せず、自分の自由なイメージを表現し、子どもの造形表現にも緩やかに接することが可能と考え、第2回『造形表現に関する幼稚園教諭と学生の意識調査』実施ついでの設定・内容を考察した。

文 献

1. 宮脇理編「4本足のニワトリ」初版 株式会社国土社 1998年
2. 高階秀爾監修「西洋美術史」第8刷 東京 株式会社美術出版社 1991年
3. 黒川健一・高杉自子編「表現」 ミネルヴァ書房
4. 加藤怜子・日名子孝三著「造形表現の指導」初版 東京 学芸図書株式会社 1996年

(注)

- (1)(2) 黒川健一・小林美実編「表現」第4刷 東京 東京書籍株式会社 1993年
- (3) 安斎千鶴子著「子どもの絵はなぜ面白いのか」第6刷 東京 株式会社講談社 1994年
- (4) 波多野完治・滝沢武久著「子どもの心」大日本図書発行
- (5) 加藤怜子・日名子孝三著「造形表現の指導」初版 東京 学芸図書株式会社 1996年